

タクシーの車内。車の振動に揺られて、うとうとと眠気が湧き上がってくる。

右手首に巻かれた腕時計に視線を落とすと、午前二時を指していた。窓越しに見える空は深い黒で、星ひとつ輝いていない。

タクシーが、自宅の前で止まった。私は、運転手に一万円札を手渡し、お釣りとして、数枚の千円札と小銭を受け取る。タクシーを降りて、深夜の冷えた空気を肌を感じながら、自分の家を見上げた。

後ろで、タクシーのエンジン音が遠ざかっていった。私の住んでいる住宅街は、都市開発で一斉に家を建てた場所だ。どの家も同じように見える。

本当であれば、すでに布団の中で眠っているはずだった。それが、仕事終わりに上司から「飲みに行こう」と声をかけられ、まっすぐ自宅に帰ることができなかった。すっかり酔った上司を送り届けると、深夜になってしまった。

上司を送り届ける間に、アルコールが抜けてきたが、まだ、酔いが残っている。

短く息を吐き、玄関の前に立った。上着のポケットに手をつっこみ、自宅の鍵を探す。指を動かすたびに、手と布の擦れる音がする。

鍵の感触がないので、ポケットの中に入っている物を全て取り出した。ガムの包み紙と、駅前でもらったポケットティッシュ、コンビニのレシート、先ほどお釣りで受け取った千円札数枚と小銭。

いつもなら、上着のポケットに入っているはずの鍵がない。念のため、ズボンのポケットや鞆の中を探す。鍵は見つからなかった。どこかで落としか、忘れたか。

仕方がないので、インターホンのボタンを押す。静かな空間に、くぐもった電子音が響く。今の音で、妻も娘も起こしてしまっただろうか。眠っている家族を起こしてしまうのは申し訳ないが、一晩中外で待っているわけにもいかない。

ドアの向こうから、スリッパをはいた摺り足の足音が近づいてきた。玄関に明かりが灯る。

「どなたですか？」閉まったままのドア越しに、女性の声が聞こえてきた。

「私だよ。遅くなってすまない。上司に付き合わされてね。ドアを開けてくれないか？ 鍵がないんだ」

「はい？ 意味が分からないのですが、どちら様ですか？」

「どちら様とはひどいな。遅くに起こして悪いと思ってるよ。頼むから、開けてくれ」

「悪ふざけなら、やめてください。警察を呼びますよ」

いくら夜中に起こしてしまっただけとはいえ、ひどい物言いだ。一応、帰りが遅くなると連絡もしていたのに。

「どなたか分かりませんが、とにかく帰ってください！」と、声がしたとき、ふと気がついた。ドア越しの声で判別しづらかったが、これは、妻の声ではない。

もしやと思い、慌てて数歩下がった。門にかかっている表札に目を向ける。

記されていた名前は、私の苗字ではなかった。